

『永遠の命に至る水』井上隆晶牧師
イザヤ書58章6～11節、ヨハネの福音書4章7～15節

①【不道徳な生活をする婦人に声をかけるイエス様】

イエス様はサマリアの町にやってきました。そこには昔の族長ヤコブが掘った井戸がありました。正午ごろ、イエス様は旅に疲れ井戸のそばに座っていました。そこに一人の婦人が水を汲みに来ました。水汲みは婦人たちの仕事で、普通涼しい朝に行きます。井戸の周りに皆が集まり、家族の事や日々の出来事を話します。しかし彼女はその輪に入りたくありませんでした。それは彼女が不道徳な生活を送っていたからです。そこに入って行けば、軽蔑の眼差しで見られ、嫌味を言われる事は分かっていたからです。サマリア人は混血民族なのでユダヤ人から軽蔑されていたのですが、その同じ民族の中でも彼女は軽蔑されていたのです。彼女はどこにも自分の居場所がなく、喜びを分かち合う人も、心配を相談できる人もいませんでした。彼女は人目を避けて生活し、誰にも会わないように真昼の一番暑い時に水を汲みに来たのです。それなのにその井戸に見知らぬ男性がおり、声をかけて来たのです。イエス様は婦人に「水を飲ませて下さい」と頼みました。井戸には桶がついていなかったからです。イエス様はこの婦人がどんな人か知っていました。しかし責めるのではなく「私はあなたが必要です。助けてくれますか」と言われるのです。これは驚くべきことです。このイエス様の言葉から、神が私たち罪人をどのように見ておられるかが分かります。人間は善人と悪人という違いを作り、悪人を排除しようとしませんが、イエス様から見たらユダヤ人であろうと、サマリア人であろうと、どんな人も違いはないのです。みんな罪人だからです。イエス様は罪人たちを必要とされます。神にとって必要でない人は誰もいないのです。（「パン屑を集めなさい」という言葉を思い出します。）

神の子キリストは33年間、地上におられ、罪人たちの中に住まわれました。しかし神が自分の横にいるのに誰も気がつく人はいませんでした。「神の目は罪を見るのにはあまりにも清い」という言葉を聞いたことがあります。その目で人間が罪を犯すのを毎日見、その耳で汚れた言葉を聞き、人が神を神ともしない生活をするのを御覧になりながら、あの方は怒りを発せられませんでした。ペトロは「私たちの主の忍耐強さを、救いと考えなさい。」（Ⅱペトロ3:15）と言いましたが、まことにキリストの忍耐強さ、謙虚さには頭が下がります。よくこんな罪人と共にいてくださる、よくこんな罪人を見捨てられないと思います。私たちが救われるとしたら、私たちが立派だからではなく、主が憐れみ深いからです。

●藤木正三牧師はこんなことを書いています。「時には、柔和に思いやり深く、そして忍耐強く人と接することもできますが、誰に対してもそうかと問われると自信はありません。やはり相手によりけりで、何時でも誰に対してもというわけ

にはゆきません。相手を選ばず、その反応に影響されず、全面的に受け入れて寄り添えるとは、とても思えません。もしそのできる人にあつたら、人間以上のものを感じるでしょう。神性とは、高貴性とか、清浄性とかではなくて、この「寄り添い性」ではないでしょうか。人の世に神が住まわれる所があるならば、寄り添う人の心の中にです。」

●4世紀のニッサのグレゴリオスはこう書いています。「上の方に向かうのが火の性質であり、火が自然の方向をとった時、誰も不思議には思わない。しかし炎の舌（聖霊）が下に向かうのを見る人は誰でも、…最も驚くべきことと見るであろう。同様に、神の力強さは、天の広大さ、星の輝き、宇宙の秩序正しさ、万物の摂理による支配によって証明されるより、むしろわれわれの弱さにまで降って来てくれることによって証明される。」

神の偉大さは、小さな私たちに目を留め、私たちの前に屈み、私たちと目線を合わせ、罪深い私たちの所まで降って来られたことだと思います。それなのにどうして私たちは神を恐れるのでしょうか。キリスト以外の神のイメージを持ってはいけません。そうすると恐れという悪魔の罠に落ちます。

②【井戸は深いのです】

この出会いが井戸で起こったことはある真理を語っています。昔から井戸は出会いの場でした。アブラハムの僕とリベカも、ヤコブとラケルも、モーセとチィボラも皆、井戸で出会い、夫婦になりました。イエス様はこの婦人と永遠の交際を持つとされているのです。しかし婦人は警戒して言います。「ユダヤ人のあなたがサマリヤ人の女の私にどうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」（9節）ユダヤ人とサマリヤ人は交際しないからです。イエス様は彼女にいます。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また『水を飲ませて下さい』と言ったのが誰であるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」（10節）この言葉は彼女だけでなくあなたにも言われている言葉として聞きましょう。人がキリストに求めないので、キリストが逆に頼んでいるのです。これが私たちの本当の罪です。すなわち私たちが救いをキリストにではなく、この世に求めていること。生き方全体がキリストにではなく、この世に向かっていることです。人間は神との交際をやめてしまいました。神を捨てたのです。そこで神の方から人の所に降り、ご自分との交際を求められるのです。これも驚きです。神は人間との交わりを切に願っておられるという事です。神はあなたと話がしたいのですが、あなたは振り向いてくれません。呼びかけても応答してくれません。「私は、不従順で反抗する民に、一日中手を差し伸べた」（ローマ10：21、イザヤ65：2）あなたが神を求めるのではなく、神があなたを求めておられるのです。

婦人はイエス様にいます。「あなたは汲む物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸を私たちに与え、彼自身も、その

子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」(11～12 節) このヤコブの井戸の水よりも良い水があるというのですか。あなたは一体どこからそんな水を手に入れることができるのですか、と彼女は言ったのです。「井戸は深いのです」という言葉は、「自分の苦悩は深いのです」という意味に聞こえます。

③【永遠の命に至る水】

イエス様は言われます。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」(14 節) ここでイエス様は、私は新しい井戸であると言われたのです。ヤコブの井戸は古くなった律法を象徴しています。キリストという井戸は福音を象徴しています。あなたはどちらの井戸から水を飲みたいですか？ 律法は人に安息を与えることは出来ません。それは彼女の六回の結婚を失敗した生き方に現れています。誰と一体になっても満たされないのです。しかしキリストと一体(結婚)になって生きる人は、満たされるのです。キリストが与える水とは彼が遣わす「聖霊」のことです。聖霊は神の溢れるほどの愛を持って来るので、その人を完全に満たすことが出来ます。聖霊が入るとその人も井戸となり、抑えきれない喜びが湧き出てきます。それはお腹の底から湧いてきて私たちの心の中にある恨みや怒りや恐れを一瞬の内に飲み込み、愛と平和で満たします。それが私たちの中に充満するので、あたかもその人は地上にいても、天国にいるように感じるのです。

●洗礼を受けるのはキリストと一体になることです。キリストとの結婚です。彼は花婿で私たちは花嫁です。想像してみてください。私の横に王冠を被ったイエス様が立ち、私と腕を組んで歩くのです。歩くと言っても私はぶら下がっているようなものです。そして彼の持っている物は私の共有財産になります。永遠の命も聖霊も神の国も私たちは受け継ぐのです。キリスト抜きでそれらを得られることは決してありえません。

いつも礼拝に出て来られるシャロン千里(高齢者施設)に入居されている高齢の女性の方がいます。彼女は重い病気を抱えていて、今まで何度も心臓が止まりそうになりましたが、生き返って施設に帰ってきます。聖餐を配ると、本当に「もったいない」というように頂きます。礼拝の後「有難いお話を聞いて本当に感謝です。心が楽になりました。」と言われます。彼女は神の恵みが分かるのです。何と謙虚な魂でしょう。毎週教会に来ているクリスチャンでもそのような魂を用意できるでしょうか。

キリストは私たちに言われます。「水を飲ませて下さい、代わりに私は天の水をあなたに差し上げます。」主は言われます。「私と礼拝して下さい、私はあなたに永遠に朽ちることのない賜物を差し上げます。」主は、罪深い私たちと交際するのを切に願い、地に降られたのです。このサマリアの婦人に倣い、私たちも勇気を出して「その水をください」と祈りましょう。